

憧れの太陽へ手を伸ば  
す

まむれ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

陰キャJKが本気の『コスプレサバゲー』にまきこまれていた頃、とある新入生が幼馴染の双子姉妹の前で久々に『コスプレサバゲー』するお話。※20??年4月時点のAR/MSの仕様です。原作では夏に突入しており、バランス調整等のアプデが入って修正されている可能性があります（独自設定の言い訳）

二次創作少なすぎて書いた。おまえらも書いてくれ。（pixivとのマルチ投稿）

# 目次

3 話	2 話	1 話
28	13	1



## 1話

銃撃。

爆発音。

それに紛れて剣を交える音が聞こえ、弓矢が宙を翔けて敵の後衛を射抜く。

かと思えばテレビで見たような装甲に身を包んだヒーローが決め台詞と共に蹴りを繰り出し、横合いから数年前のアニメで女の子に人気だった魔法少女が杖から魔法を発動してヒーローを消し炭にする。

剣と弓、銃と魔法、更にはエルフと侍やヒーローとヒロインが刃を交えるクなんでもありスな戦場オ。

(なりきる) カテゴリー不問、(なりきる) 種族不問、(なりきる) 善悪問わず、必要なのは楽しみ楽しませる心のみ。

Augmented Reality/Multiple Survive.

略称“AR/MS”、それが拡張現実を利用した全ジャンルごった煮のサバイバルゲームの名前だ。

「心が……心が死ぬ……」

さて、そんなゲームに身も心も囚われているのが俺なんだけど、行きつけのショップで心を折られていた。

リソース全部を注いだと思しき大剣を担いだ爺とやたらと佇まいがサマになってる第六感がヤバイ中年侍、公然わいせつスレスレの性癖一体型アバター持ち美女と小柄を生かした敏捷特化近接幼女、オマケに同年代だと喜んだのも早々に試合で悪質な罠を設置して爆発物をばら撒くフアッキントラップパーと、幼女とはまた違った近接特化型のロールプレイ役割演技マン。

個性が出すぎてハンマーで何度叩いても打てないメンツではあるが、実力は相応にあるやべー奴らだ。

またなんでこんなところに……と物珍しさに負けてシヨップに入ったのが運の尽き。地元でブイブイ言わせてた俺はナメてかかった初戦でボロ負けし、むきになったその日は限界まで連戦してその全てに惨敗する醜態を晒してしまった。二度とこねーよこんなところ！ とスッパリ言える程プライドを捨てられなかった結果、ずるずると通う日々が続いている。

今日は大剣爺しかいなかったからlonelyで扱かれたが、かろうじうてもぎ取った一勝以外はざっくり斬られるか押し潰されるかの結果に終わった。

「ひっひっひ……情けない。毎日毎日そんなこと言いおつて」

「うるせークソ爺。腰の代わりに性格曲がつてる若者いびりが趣味のあんたのせいだろうが」

「生意気な口が利けるなら問題ないのう。……本当に」

「んだよ、センチメンタルになっちゃって」

「三人もいなくなるんじや、いくらわしとて思うところはあるわい」

「しょうがねえだろ。いやそもそも俺だつてこんな通うとは思わなかったわ」

地元から離れたここまで来るのに交通費も時間も馬鹿にならない。一度体験してしまえば地元が温く感じてしまうもので、結局休みの日は毎日ここに来るし平日もちよちよこと足を運んでいる。おかげでAR/MSの実力は上がったと思うが……知り合いに「なんか性格悪くなった？」って言われたのは想定外だった。

「とうか俺はたまに来るつもりだしな。師匠にはまだまだ教わりたい」

「せくはらされたい、の間違いじゃろて」

「オールハゲにするぞクソ爺」

いや別に？ そんなことは決してないが？

否定しつつも俺が師匠と呼んで慕うこの常連プレイヤーを脳裏に浮かべる。競技スーツを自分でデザインし、接近戦に入った時には自分の体を利用して合法痴女ジャッジキルを狙おうとする思春期男子の敵みたいな女性……ゲーム中ではそんな性格してる癖にゲーム外じゃ面倒見が良かったり気配り出来たり、何と言っても美人だから憎めないんだよな。スタイルもいいし、同じ召喚魔法をメインに据える俺が入ってるのか物理的に距離近いしよお……いやセクハラはされたくないが？

実際、プレイスキルもえげつない。リソースの大半を召喚魔法に割り振っている癖に、発動までの動作をそれぞれショートカットして開幕に大群で敵を炙り出すなんて芸当、プロでも見た事が無い。あと投影衣装もヤバイ。具体的に言うといラストで投稿すると肌色面積が多すぎてSNSでシャドウBANされるぐらい。

なので別にやましい気持ちは一切ない。

「ま、頑張ってみるよ。そのために受験だつて死に物狂いで勉強したんだ」

「黒木々葉学園、じゃったか。前年は高校AR/MSで優勝した学校に行くとは」

「そうそう。知り合いつつーか幼馴染の姉ちゃん達がいるからどちらかと言えばそつちメインなんだけど」

「ふうむっ」

左右を姉ちゃん二人に挟まれて解らないところは解るまで教えられた去年を思い出

す。思えばそんな勉強会から逃れるためにここへ来る頻度も上がったような気がする。姉ちゃん達は文武両道なので勉強もAR/MSも結果を出す。それ自体は誇らしいけれど、そんな二人の下にいる俺にまで同レベルを求めてくるのは無理がありすぎる。本家の格式ばった人間もねちねち言ってくるしよお……分家の端っこの分際でつてのはわかるから姉ちゃん達に言ってくんねーかな……。

「白坊」

「なんだよ?」

装備を片付け、家に帰る準備をしていると爺さんが椅子に座ったまま片腕を挙げて笑っていた。

「無理はするんじゃないぞう? ここはいつでも開いておるからな」

「……ああ、知ってるさ。あんがと」

全く、ゲームじゃなきやいい爺さんなだけどなあ。

「ただいまー」

「おかえり」

「うげっ……なんでしょー姉が」

「居て、文句ある？」

「ないです……」

日も暮れて、やつと自宅に帰ったと思えば自分の部屋に幼馴染の片割れが一人、ぽつんと座っていた。菖蒲色の髪は肩にかからない程度のショートヘア、座る姿はちんまりして小動物を思わせる。紺色のブレザーを着ている辺り学校が終わってから自宅を経由せずに俺の家までやってきたのだろう。

参社院 さんしゃいん あきら 昌

普段はそんなに表情を表に出さないのに、ふとした時ににへらと笑う顔が可愛い本家の姉ちゃん。去年、黒木々葉を優勝に導いたキーマンの一人。

同じくらいだった身長も今は昔、成長期を味方につけた俺はぐんぐんと伸びに伸び、20cm以上差が開いてしまつて姉ちゃんが拗ねてしまったのは笑い種だ。俺だつて良い年なんだから、いくら年上とは言え幼馴染に良い子良い子されたくないからちやうど良かった。

疲れてたり悩んだりすると即座に見抜いて頭を膝に乗せて気が済むまで撫でてくるのは何回受けても慣れないもので、一時期はつんけんした態度を取つたこともある。

「盛光は部活どっか選ぶの？」

「決まつてるでしょ、AR/MS部だよ」

「ほんど？ ……ならば私が高校に入ってから一緒にやる頻度下がったから、今度は沢山一緒にやろう」

「てー姉にはちよくちよく見て貰ってるからそうでもないけど、しよー姉とは確かに中々予定合わなかったもん」

とは言えそれも仕方なし。AR／MS強豪校の黒木々葉学園でレギュラーを勝ち取るために活動し、更には二年から部長になった身分を鑑みればその通りであり、たまに予定が合えばやれ受験対策だのやれ息抜きだのと中々一緒にやる機会がなかったのである。まあ、ほんのちよつとだけ、天狗になつていた自分の鼻っ柱が折られたのが恥ずかしくて、意図的に控えていたところはあるけど。

……嘘。ガッツリ避けてました。過去の地元で調子に乗っていた自分を知られているから、やらないようにめつちや避けたよ。

「盛光がAR／MS続けてくれてほんとに良かったと思ってる。いつも行つてたところで戦う盛光、つまんなそうにしてるんだもん」

「そもそも辞めようとも思つてなかったけど」

「一週間くらい塞ぎ込んでた事あるのに？」

「やめてくれその話、古傷が疼くんだよ……」

こてんと首を傾げるしよー姉に眉間を抑えて溜息を吐く。

塞ぎ込んだのって例のシヨップで全敗かましたせいなんだけど。

あの時はちようど本家の横入りもあって姉ちゃん二人とも俺と会うの禁止されちゃってたからな。ただその結果さあ……いない間にAR/MSで勝手に落ち込んで勝手に立ち直って、オマケに自分たちが直そうとしていた思いあがった部分が綺麗さっぱりなくなっていました。つてなってるからお姉ちゃん風吹かせてた二人は相当衝撃を受けてみたいで。俺も俺で頑なに理由を言わないもんだから意気地になっちゃって、別の意味で遠い目になるくらいには大変だった。

例のシヨップは常連しかいないし、元々が閲覧不可設定だから俺がAR/MSやってる映像はほとんどない。俺が召喚師になった事すら、秘密にしている始末。元々は近接用の刀も使っていたんだけど、俺の力量だと通用しなかったから、それならいつそと召喚師トクシ生成に特化したんだけど……そこまで考えて、あのやたらと肌をくつつけてくる露出魔OL美人師匠を思い出して顔が少し熱くなる。

いやほんと、師匠として見れば最高なだけだね。転換して二年、下地があったとは言え一応の合格点を貰えるくらいには上達出来た訳だし。

「盛光？」

「あ、いや……まあそんなわけだから。一年でレギュラー勝ち取れるくらいの力は見せてやれるさ」

「ふふ、それは楽しみっ」

そう言つてほほ笑むしよー姉が可愛くて。

ああくそつ、そういうとこなんだよなマジで。地元でイキつてたのだったって本当はAR／MSで姉ちゃん達と何の柵もなく並び立てると思つてたからだし、クソみたいな嫌味言われても姉ちゃん達から離れないのも猛勉強して黒木々葉に行つたのだったって和風系の職を選んだのだったって、ぜーんぶこの幼馴染の姉ちゃんのせいなのだ。

しよー姉がAR／MSを始めた理由は教えてくれない。何度か聞いてみたけど、「ないしよ」と言つて頑なに口を閉ざして答えない。

だから、俺もAR／MSを始めた理由もしよー姉には秘密だ。たぶん、墓の下まで。いやバレてるかもしれないけど、言わなければ確定しない。

「でも、ウチの部員たちもそんな弱くないから、私たちと同じチームに入るなら覚悟してね?」

「知ってるよ。しよー姉とてー姉の活躍と同じくらい、場を荒らしてる人もいたしな」  
「み、見てたの?」

「逆に聞くけど見ない理由ある? いやまあ、しよー姉が俺の知ってるしよー姉と大分違うというか」

「しよ、しょうがないじゃん。婆様と母様に納得してもらえるように戦わないといけ

ないんだから！」

ぶっちゃけびつくりしたからな。薄ら笑い浮かべて相手の一手一手潰して詰めてくしょー姉と、無表情で切り捨て御免しまくるてー姉、インタビューでもロボットみたいな顔で受け答えしてるし、誰だこの人達……って呆然としつつ見た記憶は未だに鮮明だ。

だけど、それ以外にも印象的と言えども一つ、地区大会決勝でぶつかつた陽原高校はるはらだろう。なんらかの補助を付けた叫び声と共にアタッカーが呐喊してくる光景は相対する立場になって考えてみれば悪夢でしかなく、しかも一番槍を務める騎士職の女生徒は素のスペックが良くて危機察知能力も優秀、総じて戦闘センス高いのでクリーンヒットが与えにくく、てー姉ですら他のもう一人と協力して二人がかりで押さえつけていた。

「戦乙女、だったかな、あの人の戦い方も痺れたなー」

「……む」

「ああいうのは男としても憧れるよなあ！ 王道というか騎士冥利に尽きるというか。地区大会であんなハラハラしたのは初めてだったんだよ？」

「むむむ！」

「夏に会場で会ったらサイン貰っちゃったりね！ 今年はどんな風になるかな！」

しよー姉も楽しみだよな!？」

「ふん」

「あだっ!」

手放して敵の事を褒めていたら割と本気でしよー姉に殴られたのでごめんごめんと謝っておく。いや最終的に姉ちゃん達が勝つのはわかってたし。それくらい強さには信頼置いてるからね? いやほんとちよつと負けないうねとか心配したりしてないし。全然ね。

それはそれとして、あの場を支配するかのようない気呵成の攻撃は俺の心を鷲掴みにしたのも確か。しよー姉とてー姉の幼馴染でなければ、参社院の分家でなければ、俺は迷うことなく陽原高校に進んでいただろう。早く同じフィールドに立ちたい、正面からあの圧力を肌で感じたいと去年の陽原高校の試合を見返したりすることもしばしば。オマケにシヨツプの知り合いが二人、そこへ入学したと知っているならば尚更だ。

その戦列に加わることが出来たならどれ程楽しいだろう、どれ程の榮譽だろう。そんな自分を夢想して、結局それは違うんだとしよー姉のいる学校へ出願した。

内心を見破られたのか、しよー姉は相変わらず頬を膨らませてぐいぐいと腕を引つ張ってくる、正直可愛いのでそのまま放置してもいいけど、制服が伸びるのでそつと手を添えて止めさせる。

「ねえ、盛光はAR／MS上達した？」

「……昔よりはずつと」

「一緒に戦いたいつて気持ち、私だつて持つてるんだから応えてよね、お願い」

「そんなこと言われちゃったら、応えないわけにはいかないね」

んでもつて翌日。

「いちいち言われなくてもわかってるんだよそんなこと！」

「馬鹿な……！」

「油断大敵、初見殺しに引つ掛かった気分はどう？　ねえねえ今どんな気持ち？」

「諦ちゃん！　も、盛光が！　盛光があんなことに！」

「ああうん、昌ちゃんもそう思うよね……前までは態度が鼻につくけど真つ当なオールラウンダータイプだったんだけど……」

「一体どこであんな」

「みつちゃんがずうーつと教えてくれない行きつけのショップだよ。絶対にそう」

「ずるいよ盛光!!」

……黒木々葉の練習場にどよめきが走る事となる。

## 2 話

「頑張つてね盛光」

「あのさ、しよー姉」

「なに？」

「ここ、学校」

「うん」

「皆見てるけど」

四方八方から突き刺さる視線。そらぽつと出の新生が去年優勝に導いた部長とタメで話してたらそうなる。ましてやAR／MS中は性格がアレっちゃう人だから、部活中に人間らしい一面を見せるのが珍しいのもあるのだろう。

「てー姉、引き取つてあげて」

「はいはい昌ちゃん、みっちゃんに迷惑かけちゃダメ。ほらスイッチスイッチ」

ずるずるとしよー姉を引つ張つていくてー姉——さんしゃいん 参社院 あきら 諦——を感謝の気持ちで

込めて見送る。じたばたと手足を振っているがこうなつたてー姉には無意味だ。数メートル先でちゃんと立たせたと思うと次の瞬間には表情を引き締め、ぼーつとしてい

た部員達に指示を飛ばして働かせていた。ああうん、生で改めて見ると違和感凄いな……あと名前を呼びながら叫んでるけど悉く訂正されてるのはなんでだ。

「ちよつといいか？」

「うん？」

頬を掻いて苦笑いしていると、後ろから肩を叩かれたので振り返る。

第一印象は軽薄そうな奴だな、という失礼な感じだった。こちらをじろじろと睨み、値踏みするかのような視線を向けてくるのは頂けない。いや、やってもいいんだけど、解らないようにやれって話だ。

「部長——参社院さん達と知り合いなのか？」

「一応幼馴染ってやつなんだ」

「幼馴染!? へえ……なあ、AR/MSは経験者か？」

「そりやまあ、一応それなりに」

「公式戦に出たことは？」

「あ……」

すつと目を逸らす。いやなんつかさ、連携が苦手だったんだよな……あん時の俺はマジで全部一人でやりやいいだろって思ってたし、実際そっち方面から興味があればウチに来ないかって内々の打診はあったんだが。

「その反応で大体わかったよ。シヨップとか行ったりは？」

「あ、それなら通ってたぜ、常連が強い人多くてさく！ まあ二割勝てればよかつたぐら  
いかな」

「……ええ？ 二割で良い方？」

うんまあ、疑問に思うよな。でもほんとあの人たちイカレポンチで、爺の大剣に射出されて飛んでくる孫とか、嫌な予感がしたんでって完全死角からの一撃を逸らす人間卒業おめでとうございませぬ人相手に安定して勝てる方が難しいから、マジで。

だからな、「大したことなさそうだな」って顔するのやめてくれ。俺の表情筋がお仕事始めちやうだろうが。

「そうかそうか！ ま、参社院さんの知り合いだからって何でも出来る訳じゃないもん  
な！ まあなんだ、部活内で足引っ張ってくれなければそれでいいさ！」

「……………」

「幼馴染を支えたいって気持ちは大事だけど、実力が伴わなきゃやっていけねえ、特に  
黒木々々あな」

「……………」

んなこたあ誰よりもわかってんだよ、同じ新入生（多分）に言われなくてもよお、こ  
ちとら何年二人の幼馴染やってると思ってるんだ。

すつと無言で装備を整える。今回はサポート専門で行こうかと思つたが、どうしてもぶちのめしたい敵が出来たから近接用の刀を一本チョイス。その分の防具性能は控えめにして、召喚魔法の効果は出来る限り下げないように調整する。これが魔法による召喚だつたら体力にもリソースを割かなければいけないし、何より持続時間が足りないかつた。

「名前」

「あ？」

「名前、聞いてもいいか？」

「おつとわりいな、押上おしあげ昇のぼる、そつちは？」

押上と名乗つた金髪君の差し出して手をガツチリ握り、笑顔で力を籠める。

「目白めしろ盛光もりみつ。大丈夫、何があつても恨みっこ無しで行こうぜ！」

A t e a m

l i f e

J o b

《left》Mejiro《left》

6000

《left》family《left》

《left》Kanzaki《left》

12000

《left》Sam《left》

《left》Toyoshima《left》

12000

《left》Sam《left》

《left》Kaidou《left》

11000

《left》Ashi《left》

《left》Takashima《left》

9000

《left》Shamn《left》

《left》Nishi《left》

11000

《left》Shamn《left》

V S !!

B t e a m

l i f e

J o b

《left》O s h i a g e 《left》

1 2 0 0 0

《left》S a m 《left》

《left》I n b a 《left》

1 4 0 0 0

《left》S a m 《left》

《left》S e n g a k u j i 《left》

1 4 0 0 0

《left》S a m 《left》

《left》S u i d o u b a s h i 《left》

8 0 0 0

《left》M i k o 《left》

《left》M i t a 《left》

12000

《left》Shamn《left》

《left》Shinagawa《left》

11000

《left》Shamn《left》

AR／MS…… Now loading…… COMPLETED!!

「ふむ……」

というわけで戦闘が始まったのだが、オーソドックスな森林地形、仲間は前衛二人中衛一人に後衛二人とバランスが良い。

堅実にやれば一方的に負けることはなく、ぶっちゃけると俺がいるので相手に化け物が混じってない限り勝てるはずだ。例えばあの人外共みたいな存在に鍛えられた奴とかな。

「あー目白、だっけ?」

「ん?」

「す、すごい恰好だな」

「……あーこれには理由があつて」

ちやうねん。近寄つてきた侍の男子生徒の声に目を合わせず答える。申し訳程度に胸部や手足を覆っているだけで肩やお腹、太ももとかは露出しているのでどんな言葉をかけるか慎重に考えているのだろう。理由があると言われても、どんな理由だと突つ込みたくて仕方がないに違いない。

「ライフも低いし見たところ防御力もなさそう、完全後衛職つて感じ?」  
「後衛つてのは間違いないけど近接も出来るぞ」

ほれ、と腰にぶら下がる刀を指す。

「ほんとは支援に徹しようかと思つただけど、喧嘩売られちゃつたから」

「喧嘩……?」

「失敗したりしたけど、それでもたつた一年とは言え俺の夢が叶うつてのに解りきつたことを今更言つてくる金髪ヤローにだよ」

「お、俺金髪なんだが何か言つちまつたか?」

「あ、ごめん、君じゃないんだ。さつき俺に話しかけてきた奴がいてね」

後衛職でありながら近接用の武器を持つ俺を見る男子生徒の目はあまり良くない。ましてや防具も肌を曝け出して性能が低いと一目でわかるものと来れば、さもありません。

わかるぜその気持ち。俺だつて俺以外の奴が同じことやつてたら何リソース無駄にしてんねんつて思うし、ましてや初見同士でチームを組んでる今なんかは実力がわからないから尚更だ。

でもすまん、俺の気分は高ぶつてる。昔の俺とは違うとしょー姉に見せるべく、てー姉も巻き込んで秘匿し続けた新生幼馴染のお披露目なのだから。

なんせ二年だぞ？　いくらしょー姉が忙しいと言つても二年も三人一緒にAR／MSを遊ばず、しょー姉の頼みも断つて隠し通してきた。

「任せろ、今の俺は過去一で燃えてるから。せいぜい見返してやるさ」

「お、おう……まあ一回目だしな、そんなに言うなら任せてみてもいいだろう。」

「そのの二人ー！　始まるから作戦会議したいけどいい？」

更に四人、今回のチームメイトが手を振りながら近寄ってきて、俺の姿を見てぴしりと固まる。

「説得は任せろ。AR／MSは楽しんでナンボつて教わつてきたからよ」

「お前……良い奴だな。名前は？」

「神崎だ。かんざき たつり神崎 辰則、よろしくな」

「おうー！」

良い奴と言われて鼻の下を擦る神崎に、さっきの金髪くんとは違って心から歓迎する

ように握手を交わす。

それじゃあ信じてくれた仲間のためにも一層力入れちゃいますか、負けられない理由がまた一個出来ちゃったな。

「諦ちゃん……?」

「いや私に聞かれても……あんな姿は初めてみたよ」

観客席にて、黒木々葉学園の双柱となる双子の姉妹は気まずそうにフィールドを眺める。

幼馴染として何年も可愛がっていた少年が、SNSに乗せたら肌色で検索から除外されそうな姿で佇んでいる。横に立つ男子が残りの四人に何事か説明しており、少年も必死に頭を下げてお願しているのは微笑ましい光景だが、コスチュームで全て台無しだ。

確かに黒木々葉は昨年のAR/M S高校大会で優勝している。そんな学校のAR/M S部にやってくるのはガチ勢が多く、そのような人種は合理性に欠けるような装備を見て気前よく許す方が珍しい。

『それじゃあまずは期待に応えるよ』

観客席にだけ聞こえるように設定されたスピーカーが、わくわくした表情でのたまう少年の声を届けてくる。

続く少年の動作は迷いがなく、小さい声で紡がれた詠唱はフィールドのマイクでは拾えずノイズとして処理されて観客には聞こえない。

それでも。

「――馬鹿なー」

そんな叫びは誰の声だったか。

僅か数秒。本来であればきちんとした手順を踏み、相応の時間をかけて執り行う召喚魔法が、たったの数秒で完了して六芒星の陣から式神が這い出てくる。更に同じ手順でもう一度、こちらも完璧なショートカットで色違いの式神がフィールドに降り立ち、先のショートカットが偶然の産物でないことを周囲へと知らしめた。

実際、昌は二度行われたそれに我が目を疑った。

なるほど、確かに魔法やスキルにはカードをセットして詠唱やスキル名を叫ぶ一連の手順をショートカット出来る設定がある。ただし、セットや詠唱の隙を實質無くすそれらは一般的には高等技術。再現のためのモーシオン、淀みなく意味を理解して紡ぐ詠唱と、何より出来ると確信する気持ちが必要な、それこそプロの世界で扱う技術であり、ま

かり間違っても高校一年生が使えるとは思えないもの。

だが現実にはそれは目の前で行われ、少年のチームは数的有利を得る事が出来た。

「て、諦ちゃん、なにあれ？ 盛光、いつの間にあんな、あんな！」

「落ち着いて昌ちゃん、スイッチスイッチ」

とは言え、それが出来るのと知っていた諦あきらだって内心では驚いている。

前に見た時より精度、質共に段違い。連続して成功させた挙句、今も召喚魔法を続けて最早群れと言つて差し支えないレベルになっている。男子三日会わざればとよく言うが、それにしたつてこれは出来過ぎだろう。

参社院さんしゃいん 昌あきらと参社院さんしゃいん 諦あきら、二人で可愛がつてきた弟分が自分の与り知らぬところで成

長——ましてやAR/MSで——していることに思うところがないわけではないが、ひとまずは歓迎すべきことだった。まず間違いなく、自分たちと同じチームに引き入れても反対されないのだから。

眼下では召喚された式神が四方へと散つて敵の炙り出しを始めている。他の召喚タ  
イプと比べて持続時間へのリソース消費が少ないのが式神の特徴であるが、代わりにその他の能力へ振れるリソースも抑えめになっている。

「これは斥候職もクビになつちやうかも」

「……うん、そのままならね。けどみつちちゃんのあれ、消費も激しいから……今回はイン

パクト重視じゃない？」

諦の言葉通り、個人のリソースが決まっているルールの、それも最序盤であれ程の消費をするのはデメリットが大きい。敵を見つけたからと言って試合が決まるわけではなく、その後の試合の流れの中で予想外の戦局に陥った場合のリカバリーとして取れる手が狭まってしまふ。そもそも、斥候職に任せればいけない各々でリソースを出し合えばいい話だ。

これが<sup>フォックスハント</sup>キツネ狩り形式ならば話は別だが、今回の形式は相手チーム全員を倒すまで試合が終わらない殲滅戦ルール。文字通りパフォーマンズ以外に意図が見えないものであり――

その結果、式神に遭遇した相手チームがタカを括って酷い目に遭った。

『お、ま、ふざけ……………!』

式神を迎撃したアタッカー全員に等しく付与されたデバフの表示。代わりに全く減っていないライフ。嘆きの声は漏れなく被害を受けた敵チームのものだ。

「えげつない……………」

「私たちの知らないところでみつちゃんすつごい性格が捻じれちゃったみたい」「持続とデバフに全振りしてるのかな？ ダメージ自体は全然ない……………うわあ」「余計にタチ悪いわね……………」

この時点で一番正解なのはとにかく逃げる事。式神召喚は術者付近からしか発動できない上に、持続力にリソースを割けるとしても開幕でスタート地点から敵チームへ飛ばすには相応の時間がかかる。

いくら新入生とて黒木々葉AR／MS部の扉を叩いたもの者。相談する時間すらなく示し合わせたように全員が頷きあつて走り出す。

そして、彼らをあざ笑うかのように現れる式神の小隊。

「式神の開幕特攻は師匠直伝だけど、やっぱり初見の奴にはよく効くね」

先頭を走る生徒の顔が驚愕の色で染まる中、元凶<sup>盛光</sup>は接敵して消える式神の反応を確認して口角を歪めていた。

両手に持った札を投げる動作が組み込まれているので遠隔起動こそ出来ないものの、盛光が慕う師匠が扱う召喚魔法よりはショートカットの難易度が低く、数もばら撒きやすい。何より和風ファンタジーの世界観にマッチするのが決め手だった。

無視すればデバフが上書きされ、処理しようとするば僅かでも足止めされてさらに手が現れる。六人全員が盛れなく弱体効果を受けるのにそう時間はかからなかった。

「俺を過少評価した奴は今どんな気持ちしてんだろうなあ」

「目白の師匠なんなんだよマジで」

「なんなんだろうねほんと……」

俺もあの人はおかしいと思います。

チームメイトが仲間に向けるようなものではない目で見てくるのを咎めるばかりか、共感を以て答える辺り自覚はきちんとなる。まあ、その気にさせた相手が悪いのだと盛光は責任転嫁し、式神を追う相手チームへと迫るのだった。

## 3話

「なあ……目白ってほんとに一年か？」

「失礼な。いやわからんでもないけど、正真正銘一年だよ」

試合が始まって即座にショートカットを駆使して攻撃力ダウンの式神をばら撒いた後、「じゃあ走ろっか」と笑顔で全速力を指示した俺に神崎が疑わし気な目を向けてくる。しかもチートとかを疑ってるんじゃないかと、人外を見るかのような目だった。向けられる方としては遺憾砲の準備をせざるを得ない。

A Rはあくまで「拡張現実」、動くプレイヤーは人間が出来る範囲の動きしか出来ないから、式神の移動速度と行動可能範囲を当てはめれば、開幕に限り敵がどこにいるかを探るのはそう難しくない。

ましてや俺を侮ってる奴が敵にいる状況で、式神召喚をショートカット駆使して大量に差し向けるなんてありえない展開を予想出来る訳がない。新一年で組まれた親善試合の側面がある腕試しでマジギレしてる俺が大人気ないだけだ。

「にしては相当ヤバいことしてるぞ？」

「あんな、人間やれば何でもできるんだよ」

「ええ……」

「例えばミスると脳天斬られたり、どこがどう違うか文字通り手取り足取り教えられたり……」

いや痛いのはまだいいんだ。痛いのは痛いだけだが、手取り足取りつてのがそのままの意味すぎて別の意味でヤバかった。

思春期の男が美人で肌がそこそこ見えてるAR化に接触されて色々柔らかい体験をしてみろ。下半身が大変よろしくないことになる。

そもそも投影用に着るスーツだつてピッチリして身体のラインがはつきりわかるから性的に意識しないさせないのがマナーであるはずなのに、あの人はそんな余裕でぶつちぎつて来るから本当に酷い。しかも美人だしよお！ 胸もあるしよお！ 東京のゆるキャラ盛りもつこりくんとかわれたのは一生忘れねえからなア!!!

「お、おいどうした！ 勝ち確信した瞬間横からSMGの一斉射で不意打ちされた騎士職みたいな顔して！」

「俺そんな酷い顔してたか?！」

心なしか神崎が距離を開けているが、実際男子の心を弄んだOLに憎しみを抱いているのでしょうがない。

あんなはずつとやられてたらころつとオチてた。間違いなく好きになってたし、その

結果どれ程弄られたか想像がつく。そうならないよう平静を保つために式神召喚の詠唱を脳内で延々とリピートしていたのが今の練度に結び付いたのは皮肉だが……

「ん。接敵したっぽい」

「やるじゃん！ つまりそっち行けばいいってことよね！」

俺の報告にぱちんと指を鳴らし、突撃志向を隠さない少女がスキップしそうな声で俺達を急かす。小袖に袴は神崎と同じ『侍』ジョブで共通だが、標準仕様の刀より長い長刀とも言うべき武器を腰でなく背中に乗せている。というか、その子が小さいから余計に刀が大きく見える。目算で身長が140あるかないかんだが、中学生じゃないよな？

「なんとというか、改めて見ると凄いやなそれ」

「豊島さん、間違えて俺は斬らないでね」

「敵と味方の区別はついてるよお！」

ミニマム侍豊島<sup>とよしま</sup> 秀子<sup>ひでこ</sup>、色物は俺だけかと思われたがそんな中でもガールである。んばかりにデカブツ引つさげたとんでもガールである。

長刀つてクリーンヒットが難しくて変な斬り方したりすると損耗が結構早いイメージがあるんだけど、彼女は上手く扱えるのだろうか。

「じゃあ私たちは後ろで援護するから、手筈通りにやりましょ」

「なんだっけ、金髪の侍くんは目白くんがやるからそれ以外だよね？」

「……ほんとに僕も行くの？ 護衛付けずに後衛を置くのって不安なだけど……」

後衛を務めるのは高島さんと西さん、本来なら護衛兼遊撃のはずだった海道くん。懸念は最もだが、式神を置いておくし問題ない。

一言断つて更に二体の式神を召喚したあと、草木をかき分けてフィールドを走りながら進む。大きな木とか茂みの根本にしか当たり判定はないんだけど、これやらないと武器とかに損耗判定入るからロールプレイは大事。

「そう言えば放った式神って何タイプなの？」

「最初に放ったのは出来る限り耐久を減らして攻撃低下と行動時間が長いやつ。一緒に凸らせるのはリソース消費凄いいけど耐久攻撃申し分なしの精鋭タイプだね」

繰り返しになるが、ARはあくまで「拡張現実」だ。リアルをベースに装備もフィールドも整えられているし、相対する相手は実体があるから攻撃と防御の駆け引きが生まれる。

だが一部のスキルや魔法によるトークンの召喚は映像なので、当たり前だが実体を持たない。つまり、相手が盾で防御しようとしても攻撃が擦り抜けるのだ。もちろん接触判定で耐久値は減るが、同時にそれで撃破されなければ攻撃が通る。追いついておくと手応えがないからあとどれくらい攻撃すればいいかもわからないし、そもそも相打ち

上等で向かってくるから手に負えない。オマケに視界もふさがれると来たもんだ。

そんな優位性があるから召喚系は発動までの時間が長いしショートカットもシビア……のはずが師匠はそこらへんミスったところ一回も見た事ないし、遠隔起動に加えて重複召喚とかいう曲芸までやるからやってるゲームが違う。

駄目だ、師匠が凄すぎて召喚魔法使う度に頭に過つてくる。敵も近いし切り替えないと。

敵の声が近くなり、間もなく接敵すると高島さんが支援の魔法を読み込ませる間に、式神を複数召喚して数的有利の確保。

都合三体、素敵と護衛に使う分も除けばこれでリソース全部。ただしその性能は折り紙付きで、デバフ貰ったアタッカーじゃ早々落ちることはない。

あとは号令出すだけなんだが、戦闘が始まったら言えないし終わった後だと素面になるから今のうちに俺の気持ちを言っておこう。

「じゃあ作戦通りに行くけど……皆ありがとう。初対面の俺の願いを聞いた挙句、こんなロールプレイにも付き合ってくれるなんて」

改めて頭を下げて仲間に感謝を伝えると、きよとんとした後に全員が小さく笑う。

「いいっていいって。まずは楽しく、が俺のAR/MSのモットーだからね」

「突撃して斬ればいいって簡単だもん！」

「どうせ私はやること変わらないから。前衛に支援飛ばして細かい指示だすだけだし」  
「ウチも同じ。けど目白くんの考えてる通りならライン考えなくて済むから普段より楽だよ」

「僕は後先考えずに攻撃なんて普段しないので、むしろ新鮮でいいですね」

いやほんとに、気持ちの良い奴らばつか仲間になったなと自分の幸運に拍手どころかハグして親愛のキスしたくなった。

観戦してる上級生達にあつと驚くサプライズ。いや一歩間違えるとなんのつもりだテメーとか言われそうだけど、やるのはこの一回こつきりだから許してほしい

じゃあ、往こうか。

その声はフィールドに強く強く、響き渡った。

「俺たちが！ ただ一つ目指す先は!?!」

『勝利!!』

腰にぶら下げていた刀を抜き、敵チームがいる方向へ切っ先を向ける。

「じゃあ、その道行きを阻むものは——」

『ただ!! 斬り捨てるのみ!!』

素晴らしい叫び声。即興にしては熱がこもっていて、最大ブーストのマイクが音を拾って見えない圧力を相手に叩きつけていた。

何よりも、去年AR／MS部に所属していた上級生達と、夏の大会を見ていた全員が既視感を覚えた。

「止まるな! 最後まで走り抜けろ! ——

突 撃 !!

死を覚悟したような掛け声と共に、チームのアタッカー全員と召喚された式神達が鬼の形相で敵の前衛に斬りかかった。

式神によるデバフが残っている中で奇襲——いや奇襲と言うには前口上で存在を知らせてしまっていたが——にBteamの面々は浮足立つ。陣形は碌に取れておらず、前衛3人に対して襲い掛かる蛮族。音が衝撃波となつて身体を叩くような叫びと共に、文明の「ぶ」の字も知らなさそうな顔で得物の振りかぶつて襲い来る集団を前に冷静でいるという方が無理だろう。

とは言え、声の方へと向けば敵がいるのだから迎撃を試みる。懐に潜り込まれる前に

と符術で返り討ちにしてやろうと、後衛の女子生徒がとつさに指で挟んだカードを起動し、何に妨げられる事無く直撃したと確信を得た後衛が、得意げな表情が驚愕にバケツ塗りされるまで僅か一秒。

両脇に狛犬のトークンを従え——「メタ的な事を言えば相手の術攻撃は痛みがない。つまり恐怖を克服すればお前なら抜けられるはずだ」「いやお前何言つて」「そら！ 後ろから符を投げられたくなければ走れ走れ！ 突撃あるのみだぞ俺達は！」「ふっざけんなア!!」——ヤケクソ気味に煙の中から飛び出した金髪の男子生徒に一突き。女生徒の胸部を突き抜け、背中から綺麗に伸びる銀の刃をBチームの全員が幻視し、その呆然とした数秒が運命の分かれ目となる。

バフとトークンによる数的有利、それに加えて敵は跳ね返すための攻撃力を下げられているのが何より致命傷だった。

「諦ちゃん、どういふこと？」

「私が聞きたいくらいだよ……」

号令をかけた青年をよく知る参社院家の二人は真顔でフィールドを見つめる。

眼下には理性の欠片も残っていないアタッカーが、思うままに武器を振るっている。初見で気の弱そうな子だなと感じていた小柄の男子生徒が、嬉々として後衛の女子生徒

に槍を何度も突き刺してライフを全損させ、割れたと認識すると鏢迫り合いしていた敵前衛の背中を満面の笑みで貫く。

一種の狂化<sup>バーサーク</sup> 状態になっていいのか？ いやでも割った瞬間攻撃止めたし……。諦<sup>あきら</sup>

数が少ない代わりに長持ちする式神、デバフ、ロールプレイとは言え後先考えていなさそうな突撃に冷静に対処出来るはずもなく、最後に残った侍の生徒が良く知る幼馴染によつてライフがゼロになるまで何度も斬られていた。

『ごめ、ごめん、ごめんね押上くん！ ジョブ的には俺後衛だからさ！ 一思いにやれなくてほんとごめんね!!』

『嘘つけえ！ その刀ぜってー最低ランクのものだろ！ おいてめえら！ ふざけんな！ 初対面の癖になんでそんなノリノリで俺の両手足抑えてんだよ!! 聞けよおい!!』  
 『俺に……俺に実力があればこんなことにはならなかつたんだよね、押上くんの言う通りだった……俺はチームの足を引っ張ってる……』

『いてえんだよ！ 安全素材でもいてえもんはいてえんだぞ！ 物理的にお前のチームメイトが俺の足を千切ろうと引っ張ってるんだよ！ くっ、殺せ!! いや頼むから、開始前の事は謝るから早くとどめ刺してくれ!!』

AR/MSには試合中に偶然を装ってセクハラを行った相手へペナルティを行う機

能が存在するが、手足合わせて四回の機会が与えられているにも関わらずどれも「下心無し」の判決を下しているようで、大の字に固定された最後の選手はされるがまだ。……袋叩きにされた男子生徒も案外ノリが良い方らしい。惜しむらくは性別が女ではなく男であった事と、ジョブが騎士でなかった事だろう。

「……聞きたい事が出来た」

「手加減してあげてね、その状態の昌ちゃん怖いから」

去年の東京都地区大会、とある高校がお披露目した戦術。幼馴染の青年が「憧れた」とまで言った派手な突撃を青年が再現したなど、到底スルー出来ることではなかった。

参社院 諦はI v s I で仕留められなかったせいでプライドが。

参社院 昌は緻密に立てた戦術に大きな穴を開けられた悔しさが。

夏の激闘が記憶の底から蘇る。予想外の試合展開で、楽勝だと侮った相手に苦戦した事実は戒めとして二人の脳裏に刻まれている。認めたくはないが、自分たちの喉元を食い破る程の実力があると確信している。

で、そんな相手の戦法を二桁年付き合いのある幼馴染が真似たとしたら。少なくとも参社院 昌は平静でいられないし、参社院 諦も色々気になったわけで。

まあつまるところ、妹へ手加減してあげてねと言っても姉が青年を詰める場に堂々と居座る気満々であった。

『Beam全員リタイア、Atteamの勝利!』

こうして。

黒木々葉学園AR／MS部部長の幼馴染である目白 盛光の初陣は観戦していた全員の記憶にキツチリと残る事となる。

上級生の全員が、リンチされていた男子生徒に笑顔で手を差し伸べる犯人をドン引きしてみていた。